

故服部之総教授を憶う

著者	逸見 重雄
雑誌名	社会労働研究
巻	6
ページ	170-173
発行年	1956-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017431

故服部之総教授を憶う

逸 見 重 雄

法政大学社会学部教授会が服部之総君を専任教授として迎えたのは、中央労働学園大学が法政大学と合併した翌年の昭和二十七年の春からである。合併の際の学部長だった村山重忠君が勇退されて、僕が学部長に就任したのは同じ年の七月からであるから、服部君は村山部長の時に社会学部にこられ僕の部長在任中に亡くなられたわけで、服部君が社会学部の教授会のメンバーとして教職に任じた期間は四十年ということになる。

服部君の病氣は二十九年の春からのことで、その春御母堂の法事で郷里へ歸られる途中、京都で胃潰瘍の手術を受けられたが、この方は順調であつたのに、肺結核が知らぬ間に進行していたことが発見され、その治療のため約一ヶ年休校しなければならなくなった。その後自宅療養の結果、肺結核の方は一応恢復され、三十年の春から昼間部の講義には出られることになり、恰度その春社会学部が麻布新堀町の分校から富士見町本校へ移転したところ

であつたので、新校舎で何回かの講義をされ、学生の期待も大きかった。この頃血色もよく大部元氣そうで僕等も喜んだのであつたが、それもまだ本復していたのではなかつたと見え、同年秋には約一ヶ月鉄道病院に入院された。外部からは分らぬ鬱症という診断であつた。その後一時恢復されて一・二回出講されたがそれもつかの間で、十二月の終りにはまた順天堂病院へ入院された。学年末試験が近づいていたので、講義の進まなかつたことやゼミナール学生のことや卒論審査のことなどをひどく気にしているようであつた。入院直前に僕のところへ電話をよこされ「このまゝではまたノイローゼが再発する惧があるというから入院して睡眠することにしたからよろしくたのむ」ということであつた。僕はノイローゼとは神経衰弱の一種位にしか考えていなかったもので「君は余り病氣外のことを氣にかけるからいけない。今度は人間ドックに入つたつもりで一切を忘れてしまい、からつとした気分

で生れかわってくるんだネ」と激励した。面会は一切謝絶ということであったが、これも結構だと考えた。入院して無念無想の境地にはいれたら日ならずして退院出来るものと信じ切っていた。まさか、これが同君と言葉を交した最後になろうとは夢にも思わなかったのである。丁度一月から三月へかけて学校の業務は多忙になる一方で、見舞にゆかなければと思いながらそれが果されずにいるうちに三月初めに腸閉塞で手術を受けたという知らせを受けた。それから三日とたぬうちに逝去したとのしらせである。全く驚いてしまった。服部君は三月四日永久にわれわれの前から姿を消してしまったのだ。

僕が服部君を知っているのは随分古くからである。京都の第三高等学校の寮生活をしていた時、服部君は一級下で同じ寮にいた。僕は当時ラグビーの選手で北舎五室の室長として残されたが同じ北舎二室に服部君が入って来た。服部君は確か文科乙類、同君と同期で文科丙類の中谷孝雄（小説家）と文科丁類の飯島正（映画評論家）の両君は僕の部屋にいた。そんなわけで偶には服部君と言葉を交わすこともあった。この寮生活の時から三十六年の歳月が流れている。この三十六年の間に僕は随分人と変わった道を歩んできたものだが、服部君も亦そうであった。

服部君は明治三十四年島根県の西本願寺派の院下寺の総領として生まれた。島根県立浜田中学校から三高へ進学した。だから、

哲学思想の研究に向うよう運命づけられ、またその天分にも恵まれていたようだ。高校時代の服部君は、才気渾発、よく談じまたよく学ぶ。飲酒も級随一で、あけっぱなしで陰がなく、おとなしい秀才型でも、冀真面目な学者肌でもなかったような印象が残っている。三高を出てから東大文学部社会学科に学んだ。戸田貞三先生について「社会学」（ソシオロジー）を勉強されたわけだが、社会学については次第に批判的な態度をとるようになった。間もなく新人会に入ってセツツルメント運動に情熱を傾け、当時のいわゆる左翼学生の群に投じた。卒業の時には、同じく三高出身の喜多野清一君（大阪大学教授）を加えてゼミナル学生僅か四人であったとのことであるが、恐らくこの大学時代が服部君の生涯の転機となったものと考えられる。

僕は東大経済学部を二年で中退して京大経済学部の河上門下へ走ったから、大学時代の服部君については余り知らない。しかし、われわれの大学時代は、関東大震災をはさんで日本でも大きな社会変動のみられた時で、このような客観的情勢が、多くの青年の心を動かした時であったといえる。十月社会主義革命の余波が日本にもひたよせており、日本の労働者階級が自己意識を形成しつつあった時でもある。東大新人会でもいわゆる「社会思想」グループから「マルクス主義」グループへの転換を見つつあった。多感で明敏な服部君がこうした社会情勢を見落す筈がない。その幼少年時代を衆生済度の宗教的雰囲気の中に育てられた彼

が、人民解放の科学であるマルクス主義へ傾倒し、その原理と方法に立脚して日本資本主義の歴史的具体的分析へと立向っていったのは何の不思議もない。それは当時大学の講壇でえられない学問であったから、学外の学者に教えを求めつつ、やがて彼自身が先駆的役割を果たすことになるのも亦自然であった。

このような「社会科学」の学徒が、いわゆる京大連事件として治安維持法の最初の犠牲に供せられたのが大正の末期であった。しかし、服部君は当時大学を卒業していて、この学生運動の渦中にはなかった。大正十四年に大学を卒業した服部君は、約一年間東大の副手を務め、同十五年に東洋大学教授となったが、その後間もなく教職を離れ、三・一五事件の直後には大山郁夫氏の新党準備会に参加し書記をつとめた。恰度その頃、大山・河上監修「マルクス主義講座」(上野書店)が出され、服部君はこの講座に新しい史観に立つ「明治維新史」その他を執筆して、マルクス主義歴史家として言論界に重きをなすようになった。爾来専ら文筆活動に入り、論文やら著述やらでエネルギーに働いた。昭和七年に故野呂栄太郎君を中心とする「日本資本主義発達史講座」(岩波書店)が出された時には、彼も執筆陣に加わり、「明治維新の革命と反革命」を書いて、マルクス主義講座以来の専門的研究にいつそうの蘊蓄を示し、羽仁五郎君と並んで歴史学会の一方の雄となった。

高校以来の僕との接触は、前記「マルクス主義講座」の頃から再

開かれたわけであるが、専門の分野が異なるのでそれほど親密であったとはいえない。服部君の同期生には、前に述べたような理由で、労働者や農民との接触を求めて社会運動に身を投じたものが可成り多数に上る。運動の過程で斃れたものも幾人か数えることが出来る。しかし、服部君は総じて書斎の人であって、運動の犠牲になったことはなかった。その反面、夥だしい多数の論文を発表して理論的分野で貢献することが出来たともいい得る。服部君の残した論文や学会における貢献などを評価するのは本稿の目的ではないし、また僕のなしろところでもないから、そのことについては触れない。ただ「理論」と「実践」との弁証法的統一の問題については、彼は彼なりに自己生活の矛盾に悩みをもちつづけていたのではなからうかと思う。

僕は終戦の年を疎開先の木戸で迎えた。まだ物資に不足し交通も困難なときだったが、職を求めて時々上京した。そして或日、神田の街頭で服部君に遭った。服部君は僕が舗道を歩いている姿を認めて、電車から飛びおりて来たのである。あの人懐っこい態度で僕の手を固く握った。僕は今でもあの時の感動を忘れることが出来ない。暗い谷間の生活から抜けだした喜びが、期せずして二人を結びつけたのだ。このことがあってから間もなく、僕は戦前から若干の関係をもっていた財団法人協調会調査部に就職した。この協調会が解散して学校法人中央労働学園となり、その経

営するところの労働専門学校が学制改革で中央労働学園大学となり、それが二十六年夏に法政大学と合併して法政大学社会学部となり、教師と学生が建物や図書と共に法政大学の経営に引継がれることになった。服部君は、法政大学社会学部となってから最初に社会学部の教授になられた人である。社会学部では最初の二年間は「社会学原論」と「日本産業構造論」を担当していただき、後の二年は、服部君の希望もあって「社会学原論」と「近代日本政治史」を講義していただいた。社会学部に來られてからの服部君は、頭記のように病氣勝ちであつて、全然出講されなかった年もある。しかし、服部君が戦前から蓄積された専門の知識は極めて豊富であつて、それが同君の社会的名声と相俟つて、多くの学生を惹きつけたことは確かである。

服部君が社会学部へ來た二十七年の秋、僕等は法政大学社会学部の創設を記念して、芝の公会堂で公開講演会を開催した。学部として最初の試みであつた。この日の講演を大内総長と服部教授に依頼したが、嵐の日であつたにもかかわらず、千余の聴衆が堂に溢れ、多大の感銘を受けた。この日社会学部の教師、職員、学生の団結が成り、これが社会学部その後の発展の端緒となつたのである。われわれが旧学園から率いて大学に入れた学生は、昨春で大部分卒業したわけだが、本校へ移転する前のこれら学生の多くは服部君に接触した連中で、彼等は服部君に対して敬愛の情を抱いている。三月十日に中央労働学園講堂で催した服部君の追悼

式には、これら卒業生多数の参列を見た。僕は、この時、社会学部にとって服部君の存在が大きかったことを深く感じた。教師としての服部君は、あるいは「型やぶり」であつたかもしれない。しかし、社会学部のような新しい学部にとっては、服部君のような「型やぶり」教授があつてもよかつたのではなからうか。

人間としての服部君は一見豪放磊落なところがあつた。僕はよく「どちらが歳上なんだ」と人に問われたほど彼には老成した大家の趣があつた。演説は上手だし、座談にも長じ、文章も巧い。固苦しい学者というよりは庶民的政治家といった感じであつた。趣味は驚くほど豊富でまた交際好でもあつた。一言にしていえば民主主義の世に相應しい面白い風格の持主であつた。

僕は前にも述べた通り服部君とは旧知の間柄であり、鎌倉山の服部君の住居とはさほど遠くない鶴沼に住んでいる。それなのに、服部君と職場を同じくしてからは、公の会合以外の個人的接触において却つて疎遠になつていた。それはなかなか訪問の時間的余裕を見出せなかつたためでもあるが、何よりも僕自身の闘病の経験に照して、服部君の病氣は社会から暫く隔離して徹底した科学的療法に入れば必らず治るものと信じていたためである。今にして思へば、親しく接近する機会をもたないまま、学者としてはこれからという五十四歳の若さで、この有能な友を死なしたことは何とも残念でならない。